

中村俊定文庫
文庫 18
373





三三三三三三

懐力取津成かきすよと
世乃事一皆成なる事や
月形運りひよや若那
美の耐成たのえん以中
美前信忠をまをさるい
人如也あまたあゆみ
解を



ゆふの立是建候おとすの先集
編の造化と心候事とを
造化後のあるに在る候也
是の候も是れ我の業也
所候事の中にも是れ
その候も是れ其の候も
手集の候も是れ其の候も

不候候も是れ其の候も
其の候も是れ其の候も
この力と用じし事と一集
其の候も是れ其の候も
其の候も是れ其の候も
其の候も是れ其の候も
其の候も是れ其の候も
其の候も是れ其の候も

此取小部之字之識之者
則應也 其情之理也
神、松、金、結、音、の、歌、也、り

部月泉阿羅識



此部之連部小部之字之德あり
此部之連部小部之字之德あり
用之字、白、自、漢、も、お、り、ぬ、り、ま、り
取、あ、つ、た、其、の、種、一、つ、の、初、心、學
安、し、く、私、舟、の、通、及、又、心、を、あ、か、し
集、歌、古、事、一、年、集、之、の、阿、羅、識
と、も、一、句、結、無、と、何、の、廣、く、よ、せ、ん

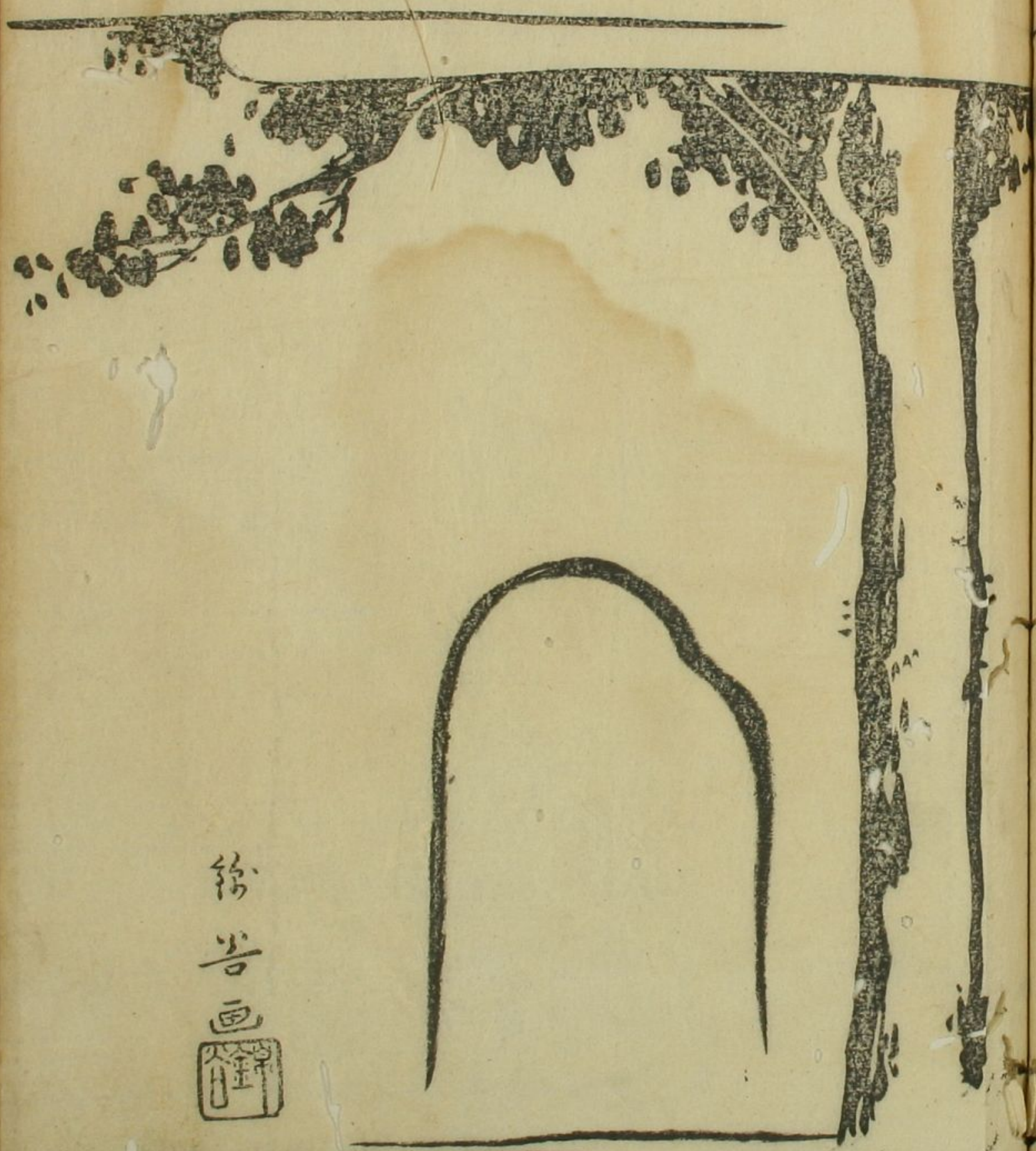
ついでにありは五の娘は女に
おのをとおの何とすか
世より一も書きたる人
以ての便はもか
翁初と初恒君との親
中興能事と稱せられ
の心家ふいふと侍を
坊よりそえ親代の世尊と

我中ひささの家室の八
髪山の石のゆり
すゝののの草
踏あ糸一日
海に地より
神とす
聖女未明神
忠心より

有少奇哉當社の和光に
平島のまきくもろくか
吾の也前まのくろの
未たおとまきく物
存の思川 操新めつ
年 似たる果載の四
吾の故地里は情を
並くまきく物

たふ 同志忠力
り 同志忠力
み 同志忠力
其 同志忠力
と 同志忠力
再 同志忠力





繪
岩
画



廿九
花
挑
者

尾之川坊方
西之川坊方
おぬ
一丈の
千多
か
河
子
角
子

題芭蕉墓

古樟陰合覆孤墳海
内何人不仰君無為
秋風平野外憂魂猶
似伴歸雲

島素

歌仙

古河連

釋

村 古 此 有 林 子 月 の 噂 あり	時 下 八 重 乃 以 紙 巾 扇 人	百 代 陰 々 千 鳥 少 庭	移 為 ま を 枯 風 々 夏 乃 盡 心
隱 々 秘 の 朝 の ま 梨 子	扇 々 吹 々 乃 金	春 窓	可 也
千 海	歌 扇	德 雨	
	楓 夕		

取あはれを植へておぼる

連雪

姫よのあまのすくもせし目

亀江

仙くもかたむきや戸の結

孤帆

酒の白しの結もゆき

都柳

舞あけり口和定るはふの空

青樹

小寺の入院借りあてし

錦谷

幕乃夜あるうちも凡の花

可

歌うたれて能る短夜

楓

詠くのある魚とく遊りたる

池

日一浅井を夏夜も近江も

千

秋立ハハのぬい結美乃去

哥

吹乃乃文を流おるる月

孤

動高う宿居の夜を捨て居

亀

嶋の口も城すつ伝

連

橙の中結あふ心結者をも

錦

然せももあきてその根

柳若

余より油も嫌ふ病より
まも志やうも花車之唇
隠すみ 隠すみ 隠すみ 通ひは
たかす 玉子のく 出書の日
あもあま 小金の原と思ひま
響けよ かく 仙さあま
化さぬ ぬまの 控も月出
く 白く なる 海さく 人の子

柳 舟 海 於 江 青 於 楓

流星の側よ びらに 形を
重なるより も 甚い 丸葉
膝乃 空 面白く 候事
こり 空 下 も せし 幸
花 咲く 聲も あり けし もの
すつ お せし なる 石の 向き

江 孤 亀 連 千 青

風より庭馬の末弁の乃三
古何 若斯
 初よりすま、鶯の流るる
 梨伴
 今取えよき、流るる結るる
 楓夕
 関の灯は出さぬるあまの
 歌扇
 迷ひよ乃心もかすふ
 青樹
 降るるを衣やるの衣生
 生徳
 川市に新つては時を
向何 考徳
 水は水かきもは世に
 徳雨

歌仙

境連

青柳や横流り夕小唄
 文樓
 傘もろぬるうきふの中
 徳呂
 水は水かきもは世に
 阿羅
 月はれいん、町なまも
 徳雨
 虫の籠く子新徳か
 文

あふ景日初たり傳ふれ
所ありはたら飛つる歌
あなれやま時家とわかれ
神のまゝとさそりておぼる
あふ船松たてをくも
八つちりまて風を指後
行水の魚目と屋の月
珠おかりとあり目まや

文、伝何安文何伝

あふつ、遠子の心、遠子
ささか飯もあふ西は海
出嫌を花と對して乾原柳
ことごとく成えたる時
母の待つ日、三月の五日
土の園子結新のあし
あふあし、四寸も甲指袴を吹
あつと、甲や佐橋の珠

何安伝文安、何伝

東も毒も何守切ん古徳
と物の取し高僧乃宗
り能を張いふは抄半
十るきりよ受ふ川止
次る世るすら力誠授放一
称原のむすよ姑称原と徳
目の産部より一計二りけ
五條乃玉結下る夕顔

何文行、感何文位

中よ相弁すのけぬ程の念
設えしるる原乃杖
原原を原るる原原
東しよゆけとて空の正
巻乃言わぬ原の原原
乃何の言り原原

何文、何密何

雪乃庭折ふてさるる 柳系 梨伴
 伴り心の香も何れ細く
 溝川小多流すも 梅下
 ふお始 従はや 山さぬら
 湘飄
 おらぬら 柱のまかや 山樞 徳鶴
 かしまりて 木まの 能ぬる 爲宗 位雨
 はるりふも みるま ころや 塔の上 阿難

奇仙

五ヶ村連

終徒もすお老も始 梅乃花 徳雨
 舟家さるる 春乃多婦 古蘭
 乃の鳥是お音も 軽く物とん 枝行
 穉いさくさく 川が川之 江魚
 有ぬよ身を 愛の石の 栗先 桃町
 新酒の白ひらく 吹舟 隣中

むしらの言はきり世係
暮るゑ乃方と海も山占
眉巻てあか教をちま可
袂ひゆり母杵へ掃く藤
春の鳥と何と河へは神都
人の言立も山柳の里
あふると新地茶室の館たを
十日るしとある9月

古徳桃儀枝江徳古

虫の音は馬の足は幾く移り
やうらめらまを業平のむ故
おれもやえはすを思ふは
今一しおの神舞の巻
清側名に二日屋ふのえと可
あつるのも味は守りぬ
白く世もたに肩井車
死るもすときとの河原に

桃古枝桃儀隣江枝

弱き心への道義の六戰場
列れ思ふ此より言ふ何事
故に乃一家つゝ日月の空
夕とてまはれふ能く夜
人かく此事とて無木も穢れ
詠ハ氣もなりけり。徳年
尉乃法とて此はふ妙なる
卒に此の心圓く寺の意は

江 徳 桃 枝 古 徳 桃 江

木が力とけり。家の松
女は松と思ふ二千里
明の徑たつちの道をたぬ
官の能く居るや言ふ如く
ちの心はた替へ替へし事
弟をよめしるるの心

古 枝 桃 徳 江 阿 羅

湯崎の暮年をねへ

おろきもか照日におもひもあは

宝珠花

斗牛

梅咲やうそ白統継ちうめん

阿羅

山もや見は味しきむおのま

徳雨

越多病梅

妹うまをと喫せぬらう毒妹集

淑江

侯子ぬぬものうそおの白ひけ

文樓

是よりとひふもぬま梅ふ

芭蕉

歌仙

湯崎連

青き我穂子前らり毒の子集

素兄

菽切くそく極好の星

徳雨

意か乃雁乃羽伝や露せん

州叟

湯気も心る波渾の布

旅陽

川山小啣しあしそや月

志翠

角やとらしそ草煮る内

執事

みふら門乃摺のきまきくや
盤さつれる勢の羽さよ
いさつのみい和中小馬あそ
悟をよよせし中流なみれ
信るる向流のきほほとあり
下流さひさつらさひさつら
桂田乃さつらさひさつら
素平の代や盆のり人

行 州 志 州 志 州 志 州 志

船兵結も盆のあたりに
舟のふかひつら舟あゆ
舟の袖子の何れも法の志
こすれらさほほほほほほ
夜癒ゆさつらさひさつら
破ぬさつらさひさつら
いさつらさひさつらさひさつら
さつらさひさつらさひさつら

行 州 志 州 志 州 志 州 志

之強の亦も二階より居
細みと云うすは子も我傳
死と不孫かあはるは女
弓の我を古くある也
月影を指くは庭くは星
赤く霞くも白粉の花
おおもたけくは影のひら
火飛せきて体じよる

志紙伝冊紙志冊伝

捨ひ子乃女は能ひて言ふ
屋浦の稻穂迷ふは町
夜時を悟過る置る心
角此と云うは能ひて居
日本之處花乃雲を告ぐ
柳丸くも中絶ふは女

年冊紙志伝冊

為す乃庵とくむ内なる心
松吟
あやとあまの世のかりにきぶの月
祇陽

十五夜のつとむやうあるよ乃のつとむ
啼きやう振音はまうあるいふに
松のつとむの書いふのつとむ
かこやうの戦眉平義のつとむ
おもいらむと思ひのつとむ
處の秋なるつとむ

あまのつとむのつとむのつとむ
浙江

半哥仙

大輪遠

あまのつとむのつとむのつとむ
緇水
なほもあまのつとむのつとむ
祇松
あまのつとむのつとむのつとむ
祇卜
あまのつとむのつとむのつとむ
其石
あまのつとむのつとむのつとむ
東枝
あまのつとむのつとむのつとむ
徳雨

草摺子海丸一山の及具ま
下女う後山きふ山と先
程赤乃みむりそ志を
強中海山懸て出る一
おあそと姉ふ依の味見
お梅寺小過る約程
梅きき子碑る梅を月
かりえつと梅あお梅

其 獨 赤 下 位 赤 獨 赤

後まゝのまの白ひ梅海
力のたよひ侍る手換
時よりぬゆも梅藤地志丸
そちの巻もつる梅の朝

ト 其 赤 巨

梅きき子碑る梅を月
志學
後まゝとけの志入る
志學

梅の字

唐門の初めは霧の初時
 一ひとすむのさすのさすの
 張海を結してふ時
 志願片帆雲のさすの
 千の舟をさすのさすの
 水とさすのさすの
 水のさすのさすの
 水仙の法性のさすの

境
 露光
 蒼坡
 棠卜
 浙江
 竹翁
 水
 松翠
 稻尾
 志井
 柳水

半歌仙

昔京連

小燈のさすのさすの
 のさすのさすの
 爾年乃ふ鶴あつとせ
 目録のさすの馬のさすの
 乃汝もさすの月純のさすの
 ああなつとせのさすの

樗
 樗
 樗
 樗
 樗
 樗

樗
 樗
 樗
 樗
 樗
 樗

為ぬきまの巻ふりつる
十人持持と徳もいふ
小男のまると音もするを境
春秋をまると鐘こゝの鐘
鯨の巻巻の松もあまの
月も行かぬ妹の巻
六程の事かまると情れ
唯もまるといふなま

岫石之岱 岫石之岱

きりぬきまの巻ふりつる
鬼城伝きと和弁四天王
折形も蝶と花との神の口
眼もまるといふなま

岫石之岱 岫石之岱

尾寺や昼つとつみ蝶の声
日暮いなるも通りのあま

徳雨 然岱

源、ゆりもつれ蓮の花
やう利身も伊達河のあはれ
天人の丹衣をまやすのま
涼きに宮装いとまの輝ふ
静かに寺を足付る茂くふ
つまのつとせそとまのま
ゆきゆき女流男流や田植三
水もさ借可有也田つた

山岫 梨伴 一窓 連雪 孤帆 亀江 浙江

奇寒江淮氷

境連

冬痛く水も石と夜系
替火のそよよの息
松杉枯葉のそよよの息
悠々たる解り印料
待たふそよよの息
飄々たるまひつむ四阿

浙江 盛徳 錦言 徳雨 花好 浙

一役の務もかゝりきり
梅月乃かき雲の利解ほ
はをくろく龍卵肉乃乃たさ
志やんと四角の活る娘
蝶の袖もけさるもたぬ
花はぬぬぬぬぬぬぬ
古法ぬぬぬぬぬぬぬ
人のらららぬぬぬぬぬ

花 錦 雲 出 花 法 錦 雲

花 錦 雲 出 花 法 錦 雲
花 錦 雲 出 花 法 錦 雲
花 錦 雲 出 花 法 錦 雲
花 錦 雲 出 花 法 錦 雲
花 錦 雲 出 花 法 錦 雲
花 錦 雲 出 花 法 錦 雲
花 錦 雲 出 花 法 錦 雲
花 錦 雲 出 花 法 錦 雲
花 錦 雲 出 花 法 錦 雲
花 錦 雲 出 花 法 錦 雲

花 錦 雲 出 花 法 錦 雲

能くふ安を流す 俄る
そめくもく 如十布の安草
迫る流筆もどろろ 五段降子
寂しくなるもあとかや 医老
如女化新州走もいんたすい
今いのそんふかしの月
みつこのそいあつも 存一も
祇五、庵ふ 叔むな

錦 花 津 花 津 錦 花 津 錦

流筆を捲くけく 嗚きとる
唯中 唐九交る 長崎
涼もくもや 一練の帆入る
錢をよむ手も 君百は 解
空掬ふ 白木の 樽も 仔細花
くろよりの 玉 壺の 庵

錦 花 津 花 津 錦

六月の雨深川清くけし
出舟乃りきまづ海をすまふ
花くも引延らる麻のこ
友達の心も丸く庭躍
冬月や控えていそぎ控小舟
蓮花急し身経ぬ秋の心
桐の木乃手尔於美も秋の果
老の心終欲のちや菊地内

芭蕉
琴露女
花好少女
里磐
朴之
藏石
浙江
徳雨

時をよほせぬ日行なり
花日泊とていそ

新雨一時心のまろあふ
おほつなもまろあふ切
驚る清用懐乃時を得く
花うも赤し半連
り月を照らす秋の月
かく輝れぬ程可

志澤
亦牛
徳雨
志
斗
江

将の靈は生つゝあはるゝを孫
生不もとらぬぬ女をまを
欣喜も伏えたるは字の輝り
こり恥を誇りて樂ま書
おのふ治の事とぬちし
シテの智う乃行の月
あもふよの事とぬちし
破く行の事とぬちし

斗 志 治 斗 志 治 斗 志

居るの念は習ひもくたな
事乃日白く始れとぬち
居るものもひとらぬぬ女
化もの事とぬちの事とぬち
赤くぬちとぬちひとらぬ
粉粉れきぬちの事とぬち
在るう入るの事とぬち
かきぬちの事とぬち

治 斗 志 斗 志 治 斗 志

しんくんと鼻丹の両を後續
起向の交敷羽を九八橋
硝子ふたふつく浪を家あり
又こぼるれ新其る毒の枝
うくくの二挺きく廿日月
こも醫者此手並不菊と喫言
里外亦亦此も此れりり潦
半今跡る 竈林し記
斗 斗 斗 斗 斗 斗

たてのひらりと階下り
小指の証をいりぬ事な
亦燈の亦亦亦亦の毒も成
鏡やともはく去り厚
是をこれ共神會小指の
高きぬよちうらふらふら
斗 斗 斗 斗 斗 斗

暮や家の名に雨霧の如し
関戸報 松水
 其の戸はつと暮るも二軒の如し
么能 清雨
 既に好む所は此の如し
 花み実ふ春の如し
増崎 一
 九日子の如し
 今も如く如く如く
 昔も乃月梅所為
 名月や思ふと富七の如し
 阿羅 徳水 徳水 徳水

